

研究ノート

養護教諭養成における臨床病院実習の一考察

—クリニック実習での学び—

A Study of the Clinical Training for the Yogo Teacher Training Course

— Learning in Clinic Practice —

石田妙美*, 梶岡多恵子*

Taemi ISHIDA, Taeko KAJIOKA

キーワード：病院実習, クリニック実習, 養護教諭養成

Key Words : Clinic Practice, Clinical Training, Yogo Teacher major

要約

養護教諭専攻の学生 117 名を対象に、クリニック実習での学びを調査し、養護教諭志望指数 (0~10)、学校ボランティア経験の有無で比較した。また、病院実習目標項目で比較した。その結果、クリニック実習の目的や学びと養護教諭志望指数との関連はなかった。クリニック実習での学びは、患者や保護者の気持ちの理解、学校との連携や養護教諭の職務に活かすなどの記述があった。これはクリニック実習の指導者が学校医であり養護教諭の役割をよく理解しているためであると推察した。今後さらに充実のために、具体的な目標項目を列挙した教材や実習経験を全体でシェアする必要がある。

Abstract

For 117 students of the Yogo teacher major, we studied learning in clinical practice and compared it with the school volunteer experience with the Yogo teacher aspiration index (0~10). Also, we compares them with hospital practical goal items. As a result, there was no relation between the purpose and learning of clinic training and the Yogo teacher aspiration index. Learning at clinical practice was described; such as understanding the feelings of patients and parents, collaboration with schools and utilizing them for duties of the Yogo teachers. I guessed that this is because the leader of clinic training is a school doctor and understands the role of Yogo teachers well. For further improvement, it is necessary to

* 東海学園大学教育学部教育学科

share the teaching materials listing concrete target items and the overall individual practical experience as a whole.

1. はじめに

現代の児童生徒には、肥満・痩身、生活習慣の乱れ、メンタルヘルスの問題、アレルギー疾患の増加、性に関する問題など多様な課題が生じている。このような多様化複雑化する児童生徒が抱える現代的健康課題については、専門的な視点での対応が必要であり、養護教諭が専門性を生かしつつ中心的な役割を果たすことが期待される。養護教諭の役割は、医学的な情報や現代的健康課題について最新の知見を学ぶこと、地域の関連機関と連携できるような関係性を築くことである¹⁾。すでに、中央教育審議会答申²⁾でも、養護教諭の職務として「子どもの現代的な健康課題の対応に当たり、学級担任等、学校医、学校歯科医、学校薬剤師、スクールカウンセラーなど学校内における連携、また医療関係者や福祉関係者など地域の関係機関との連携を推進することが必要となっている中、養護教諭はコーディネーターの役割を担う必要がある。」と明記されている。また、養護教諭が認識する周囲のニーズでは、けがや体調不良の処置や医療機関受診の必要性の判断など救急処置に関するものが最も多く³⁾、これらのことを担うためにも学生時代に医療機関で実習し、病院の組織や職員の業務内容、専門性、考え方など将来連携する重要な分野を経験する必要がある⁴⁾。

2. 臨床病院実習について

東海学園大学における臨床病院実習は、2年次春に実施する臨床実習Ⅰ（クリニック実習と療養型病院での実習、保育園実習）と、3年次春に実施する臨床実習Ⅱ（総合病院10日間、教育相談センター見学実習）の2段階で実施している。

臨床実習Ⅰの実習目標は、医療機関の利用の仕方、診察や検査や健康相談などの医療活動を知る、医療スタッフの患者への接し方、看護の基本、看護する側と看護される側の気持ちを知る、命の大切さ、生と死について考えるで、見学実習が主である。臨床実習Ⅱの実習目標は、成長発達過程における生理的变化や疾患における病状変化を理解する、看護の基本を体験する、看護する側と看護される側の気持ちを知る、命の大切さ、生と死について考える、医療体制を知り医療機関と学校（養護教諭）との連携を知る、医療機関で行われている健康教育を知るで、講話や見学と体験のある実習となる。

本学で実施しているクリニック実習の実習施設を表1に示した。診療科は小児科が中心であるが、外科系のクリニックでも企業等の健康診断を担当し、地域のホームドクターとなっている。男子学生は小児科・内科では実習の承諾が得られないため、外科系のクリニックの確保は必須である。クリニック実習は、養護教諭の職務をよく理解している指導者のもとで実習でき、診察の

見学や介助、患者への対応から学校健診や保健室での執務に活かせるなどのメリットがあることから実施しているが、半日4日間という短い期間で学生たちは何をどの程度学んでいるのであろうか。

表1 クリニック実習施設と特徴

施設	診療科	実習内容の特徴
A	内科	午前・午後の診察、往診の見学
B	小児科	午前・午後の診察
C	外科	午前の診察・健康診断
D	内科・小児科	午前・午後の診察、不登校支援教室見学
E	内科	午前・午後の診察、受付
F	小児科	午前の診察、アレルギー外来
G	小児科	午前・午後の診察、保健所での健診見学
H	小児科	午前・午後の診察
I	内科・小児科	午前・午後の診察、病児保育、薬局見学
J	内科	午前・午後の診察、受付
K	整形外科	午前・午後の診察、リハビリ見学、問診実習

3. 目的

そこで本研究では、臨床実習Ⅰにおけるクリニック実習での学びの記述を臨床実習Ⅱの評価項目である実習目標の具体的な内容と比較し検討し、本学の臨床病院実習におけるクリニック実習の学びの成果と課題等を明らかにすることを目的とした。

4. 方法

対象は、養護教諭専攻1年生から4年生である。回答数は126名、そのうち養護教諭の免許を取得しないと記載した9名を除いた117名を調査対象とした。

本研究の調査内容は、養護教諭を志望する学生自身の気持ちやクリニック実習の目的理解など臨床実習の授業内容に関するものである。

調査は無記名で、平成29年10月に「有料版SSL ふぉーむまん」を使用して実施した。

調査項目は、クリニック実習の目的、クリニック実習での学び、養護教諭になりたいと思う志望指数（0：なりたくない～10：絶対になりたい）、学校や保健室でのボランティア、クリニックなど医療機関でのアルバイト経験である。また、クリニック実習を体験した者は、クリニック実習での学びを記述させた。

調査結果は、単純集計後、養護教諭志望指数、学校や保健室でのボランティア、クリニックなど医療機関でのアルバイト経験とクリニック実習の目的や学びとの関連についても検討した。またクリニック実習の学びと病院実習の目標項目とを比較した。

倫理的配慮は、調査の目的、個人情報保護等について、調査説明時に口頭で説明するとともに、調査依頼メールの本文に記載し、かつ、「有料版SSL ふぉーむまん」の設問の冒頭部分にも以

下のように明記した。「この調査は無記名です。結果はよりよいクリニック実習の実施のために使用させていただきますが、個人情報に留意し統計的に処理いたします。また、回答を中断したり、回答しなくても構いません。」さらに、ふぉーむまんでは回答後送信する前に必ず「上記の内容で送信しますか?」と表示され、途中で回答を中断することもできる。無記名の調査であることに加え個人が特定できないように、かつ、対象者が拒否できるように配慮した。

5. 結果

(1) 養護教諭志望指数

養護教諭になりたいと思う志望指数の学年別平均値を表2に示した。卒後の進路と養護教諭志望指数を表3に、学校でのボランティア、保健室のボランティアと養護教諭志望指数との関連を表4に示した。

養護教諭志望指数の平均は、1年生が8.5と最も高く4年生は6.8と低値であった。4年生の養護教諭志望指数の標準偏差が4.0とばらつきが大きかった。

表2 養護教諭志望指数

学年	n	志望指数		最大	最小
		平均	標準偏差		
1年生	46	8.5	1.9	10	4
2年生	23	7.9	2.7	10	0
3年生	27	8.6	2.0	10	3
4年生	21	6.8	4.0	10	0
総計	117	8.1	2.7	10	0

表3 養護教諭志望指数と卒後の進路

卒後の進路	養護教諭志望指数										総計
	0	1	3	4	5	6	7	8	9	10	
絶対に養護教諭として働きたい							2	2	9	59	72
1年生							1	1	3	24	29
2年生								1	2	11	14
3年生							1		3	14	18
4年生									1	10	11
採用試験に受ければ働きたい			2	3	6	6	7	2			26
1年生			2	2	1	2	4	1			12
2年生				1	4	1					6
3年生						1	3	1	1		6
4年生								2			2
免許は取得するが他の仕事をする	5	1	2	1		2		1			12
1年生								1			1
2年生	1										1
3年生			2								2
4年生	4	1		1		2					8
その他			1		3	1		2			7
1年生					3			1			4
2年生			1			1					2
3年生								1			1
総計	5	1	3	3	6	9	8	12	11	59	117

表4 学校や保健室でのボランティア経験と養護教諭志望指数

学校・保健室ボランティア経験の有無	学年 n	学校ボラ n	保健室ボラ n	志望指数 平均	志望指数 標準偏差
1年生	46			8.5	1.9
現在、学校でボランティアをしている。		3		8.3	1.7
保健室ボランティアはしたことがない			3	8.3	1.7
学校でのボランティアをしたことがある。		21		8.7	1.9
現在保健室ボランティアをしている			1	10.0	0.0
保健室ボランティアを過去に経験した			2	7.5	2.5
保健室ボランティアはしたことがない			18	8.8	1.8
学校でのボランティアをしたことがない。		22		8.4	2.0
保健室ボランティアを過去に経験した			2	8.5	1.5
保健室ボランティアはしたことがない			20	8.4	2.0
2年生	23			7.9	2.7
学校でのボランティアをしたことがある。		11		9.1	1.7
保健室ボランティアを過去に経験した			1	10.0	0.0
現在保健室ボランティアをしている			1	10.0	0.0
保健室ボランティアはしたことがない			9	8.9	1.9
学校でのボランティアをしたことがない。		12		6.8	2.9
保健室ボランティアはしたことがない			12	6.8	2.9
3年生	27			8.6	2.0
現在、学校でボランティアをしている。		5		9.0	1.1
現在保健室ボランティアをしている			5	9.0	1.1
学校でのボランティアをしたことがある。		10		9.3	1.0
保健室ボランティアを過去に経験した			3	9.0	0.8
現在保健室ボランティアをしている			3	9.7	0.5
保健室ボランティアはしたことがない			4	9.3	1.3
学校でのボランティアをしたことがない。		12		7.8	2.6
現在保健室ボランティアをしている			2	8.5	1.5
保健室ボランティアはしたことがない			10	7.7	2.7
4年生	21			6.8	4.0
現在、学校でボランティアをしている。		2		9.0	1.0
現在保健室ボランティアをしている			2	9.0	1.0
学校でのボランティアをしたことがある。		15		7.5	3.9
保健室ボランティアを過去に経験した			7	9.9	0.3
現在保健室ボランティアをしている			4	9.5	0.9
保健室ボランティアはしたことがない			4	1.3	1.6
学校でのボランティアをしたことがない。		4		3.0	3.0
保健室ボランティアはしたことがない			4	3.0	3.0
総計	117			8.1	2.7

卒後の進路で、絶対に養護教諭として働きたいと回答した者は72名(61.5%)で、1年生が多かった。免許は取得するが他の仕事をすると回答した者は4年生が8名と多かった。

学校や保健室ボランティアの経験をしている者は、養護教諭志望指数が高い傾向がみられた。特に4年生で学校や保健室でのボランティア経験のない学生の養護教諭志望指数は顕著に低値であった。

(2) クリニック実習の目的と学び

表5にクリニック実習の目的を養護教諭志望指数別に示した。

志望指数に関わらず、クリニック実習の目的は概ね理解していた。また表には示さなかったが、クリニック実習未経験者の記述もクリニック実習の目的を概ね理解している内容であった。ま

た、クリニック実習での学びの記述においても養護教諭志望指数の高低にかかわらず記述内容はほぼ同じであった。

表6は、現行の臨床実習Ⅱ（総合病院での実習10日間）で使用している評価表の目標項目に、本研究の対象者がクリニック実習で学んだと記述した内容を一覧にしたものである。

一覧にするにあたって、例えば「患者とコミュニケーションがとれる」、「家族の気持ちに配慮した行動ができる」、「気になったことをスタッフに報告できる」といった項目については、その内

表5 クリニック実習の目的（養護教諭志望指数別）

志望指数	クリニック実習の目的
0	クリニックは大きな病院に比べ、地域密着度が高く、地域の住人の方と世間的な話も含めて診察が行われることが多い。養護教諭の資質として傾聴力は極めて重要なため、その資質を会得する。また、総合病院前にクリニック実習を行うことで病院そのものの雰囲気慣れることも必要。医師と患者の関わり方、怪我や病気の症例、処置の仕方など小児の発達段階やそれに合わせた看護を直接見て学ぶため。地域住民の最も近くにある医療機関で行われる治療、ケアについて学ぶため。
1	学校、クリニック、地域との連携を学ぶため。
3	クリニックの患者さんは、乳幼児から年配の方まで幅広いため、医者や看護師がその患者さんに合った対応の仕方や様子、コミュニケーションの取り方を観察し、学ぶことが出来ると思病気の種類や、血圧の測り方、看護師さんと患者さんとの関わり方について学ぶため。
4	子どもが体調を崩した場合、受診するのはクリニックが一般的だから。
6	地域のクリニックではどのような活動、処置が行われているのか自分自身で体験し理解を深めるため
7	クリニック実習だと病気にかかってどんな診察を行なっているのかなど総合病院と違った視点を見て学ぶためだと思っています。看護の実際を知るとともに患者との会話から患者の状態を察するスキルを学ぶため養護教諭になったときに、児童生徒がかかる場合があるため、どのような流れで診察を受けるのか等を知るため。また、地域のクリニックの役割等を学ぶため。
8	養護教諭が子どもを病院に連れて行く際、病院側は養護教諭に何を求めているか学ぶため。様々な疾患を学ぶために、症状と疾患名を実際に見て学ぶため。各クリニックの地域性を知る住民にとって身近な存在であるクリニックの実態を知る地域で行われている医療や、養護教諭との関わりについての理解を深めるため。地域で流行している疾患や子ども、親の様子などについて知ることができる。
9	クリニックの職務を理解して、クリニックから養護教諭にも共通する専門性を学ぶ現場に出た時に、必要だから子どもの病気を知ることや地域での医療活動を知るためにすると思います。大きな病院で実習する前段階として。また、クリニックと総合病院の違いを知るため。養護教諭として、子どもたちをけがや病気でクリニック等の病院に連れていくのは、日常茶飯の様にある。そのため、クリニックと学校の連携について、学ぶにあると思う。
10	1番身近な医療機関でどのような理由で来るのか知るためクリニックは地域の人々にとって総合病院よりも身近な存在であるから、その点が学校の中の養護教諭の役割に似ているから。こどもたちへの関わり方や医療についてほかの病院実習に比べて深く学べるその時期にどんな疾病が流行っているのかなど、また学校医をしている先生もいらっしやるので、養護教諭につながるものがあると思うため行う。どのような対応がされているのか学ぶため。学齢期における心身の特徴や病気について理解を深める。看護や医療の現場から健康や命について学び、養護教諭としていかすため。軽傷の患者さんに対する処置を学び、将来養護教諭として活かすため。子ども、その保護者とかかりつけ医さんとの関わりを実際に目で見て学び、現場に生かすため。実際に診察の状況を見ることで、この主訴にはどのようなことを聞くべきかを学ぶため総合病院との違いを知るため。総合病院へ行くまでもなく、緊急度は低いが、受診が必要となる症状等を見て、保健室での判断にいかすため。地域のかかりつけ医として患者とのコミュニケーションの取り方や信頼関係の築き方について学ぶため。地域のクリニックは、地域のつながりや、小児での子どもの関わり方を学べるところだと思う。地域の医療機関の実態と学校との連携の仕方を学ぶため地域の患者さんへの接し方等を学ぶため地域の人の関わり方や学校で起こりうる怪我や病気の処置を実際に観察することができるかめ。病院という臨床を知り、その知識を養護教諭として学校現場で動める際の知識として活用するため。また、処置に対する姿勢や基本などを学習し身につけ、実施できるようにするため。保護者と身近なお医者さんといった関わり方を見るため様々な疾病を知って実際の問診、診断、処置の流れを学ぶため。また、医療スタッフ同士の連携の仕方やスムーズに対応を進めるための方法を学ぶため。養護教諭として現場に出た時に、より円滑に、地域の医療機関との連携を図っていくことができるようにするため。養護教諭として働く際、地域の病院と連携をとるため。(学校三師等)

表6 クリニック実習での学びと現行の臨床実習目標との比較

現行の臨床実習Ⅱ(総合病院10日間実習)の目標と内容		本研究のクリニック実習での学び
目標	具体的内容	回答例
疾患における病態を理解する	生活習慣病の特徴に関する記録(各1例)がある	
	感染症の(病児)特徴に関する記録(各1例)がある	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症についての知識 ・感染症対策 ・インフルエンザなどの症状の実際 ・地域で流行しやすい疾病等の知識
看護の基本(安全・安楽の方法、清潔法、バイタルサインの測定法、救急処置等)を体験する	療養上の安全対策の方法(転落、危険行動の予防のための工夫)に気づけた記録(1例)がある	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども目線での安全面(机の角にコーナークバーを装着する等)
	症状に適した安楽な体位の工夫に気づけた記録(1例)がある	<ul style="list-style-type: none"> ・患者への配慮の工夫、対応の仕方
	医療と療養生活における清潔の方法(病院内や身体清潔の工夫)に気づけた記録がある(1例)	<ul style="list-style-type: none"> ・衛生管理の仕方
	患者の病状とバイタルサインの特徴を理解している記録がある(1例)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに多い疾患(喘息、感染症等)の症状 ・基本的なバイタルサインの取り方
①医療スタッフの患者への接し方を学ぶ ②看護する側とされる側の気持ちを知る	救急処置事例の記述がある(1例)	<ul style="list-style-type: none"> ・処置の仕方など ・外科的処置
	患者とコミュニケーションがとれる	<ul style="list-style-type: none"> ・病児との関わり方 ・病気で来院する子どもとへの声の掛け方や接し方 ・患者との信頼関係の築き方 ・子どもが理解しやすいように病状を伝える方法 ・お医者さんの親身になって保護者の方の話を聞く姿勢、対応 ・年齢によって、検査の説明や症状から分かることの説明などの仕方を変えることが大切
	患者の痛みに配慮した行動の記録がある(1例)	<ul style="list-style-type: none"> ・ただ話を聞くだけで気持ちや身体が楽になる方が多い
①医療体制を知る ②医療機関と学校(養護教諭)との連携を考える	その日の実習目標、患者の病状変化、患者や家族からの要求、観察して気になったことなどをスタッフに報告できる(記録がある)	<ul style="list-style-type: none"> ・医者や看護師、医療事務の方々の連携の上で医者が成り立っている ・ホウレンソウの大切さ
	家族の気持ちに配慮した行動ができる	<ul style="list-style-type: none"> ・診察や検査待ちで不安を抱える子どもや親への配慮を看護師がどのように行っているか ・保護者への共感や配慮の仕方 ・お医者さんの親身になって保護者の方の話を聞く姿勢、
①命の大切さ 生と死について考える ②医療機関で行われる健康教育について知る	医療体制からみた実習病院の特徴の記録がある	<ul style="list-style-type: none"> ・受付から診察の流れ ・地域に根ざした医療、患者様と医師・看護師の信頼関係があること ・地域に根ざした治療をしており、患者との距離が近い ・地域の人々にとって身近な存在であるクリニック
	救急時に医療機関に提供する情報や連携に関する記述がある	<ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭が子どもを病院に連れて行く際、病院側が養護教諭に求めるもの ・記録として残すことの大切さ ・日常に頻繁に起こりうるケガや疾病への気づき方、対応
①命の大切さ 生と死について考える ②医療機関で行われる健康教育について知る	「死生観」を自分の言葉で述べた記述がある	
	実習病院で実施している生活習慣病の予防と治療方法、健康教育の内容に関する記述がある(1例)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者に寄り添い、人それぞれに合った言葉づかいや患者が理解できる説明をすることが大切である
養護教諭の視点で実習する	実習で学んだ事柄を、養護教諭として活用しようと考えた記述がある	<ul style="list-style-type: none"> ・問診の方法 ・保健室対応の参考になると思った ・小児が健診を受けるときの留意点や、症状の様子 ・発達段階の違い ・養護教諭は、保健室入室者の症状の適切な見極めをし、常に方が一のことを考えること ・症状が軽くても病院受診を勧めることで、例えば、学校のインフルエンザの蔓延を防ぐことが出来る
*その他		<ul style="list-style-type: none"> ・周りを見て今何をしなければならぬかを判断し、行動する大切さ ・どんな時も患者さんの気持ちを第一に考えることが大切である ・笑顔の大切さ ・効率よく仕事を進めるための工夫 ・国の保険制度 ・医療制度

容に気づけた記載とした。

「生活習慣病の特徴」「死生観」についての記載はなかった。しかし、評価項目にはない小児の疾病や症状、クリニックを利用する患者の疾病に関することを学べたとの記載があった。また、笑顔や患者の気持ちを第1に考えること、何をすべきか判断し行動することの大切さなど実習態度や医療制度についても学べたようである。

6. 考察

(1) 養護教諭志望指数

4年生の養護教諭志望指数が一番低かったが、これは4年生になるとすでに卒後の進路を決め

ており、志望指数が高い学生と低い学生の2極化していることによるものである。

学校や保健室でのボランティア経験と養護教諭志望指数とは関連があり、志望指数の高い学生は、学校や保健室でのボランティアを経験していた。

(2) クリニック実習の目的と学び

本研究では、養護教諭志望指数やクリニック実習経験に関係なく、クリニック実習の目的を概ね理解していた。これは、1年次の「学校保健」、「養護概説」2年次の「養護実務演習」「健康相談活動の理論および方法」などの科目で養護教務の職務を学ぶときに必ず学校医の役割と連携について学ぶからであると推察した。

養護教諭養成課程での臨床実習では、実習施設を総合病院にしている大学が多い（日本養護教諭養成大学協議会FD委員会2009）。しかし本研究の結果、クリニック実習においても疾病の理解、安全・安楽・清潔・バイタルサインなどの看護の基本、医療機関と学校との連携、養護教諭の職務に活かす視点で学べていた。これは、クリニック実習での指導者は学校医をしている医師と主任看護師であることから、養護教諭の役割をよく理解されており、学校との連携についてもエピソードを交えて学生にわかりやすく説明されているからではないかと推察した。

さらに、最近総合病院では経済効率から小児科の診察を減らすところが多く、本学の臨床実習Ⅱでも小児科での実習ができない実習施設もある。クリニック実習では小児科を中心とした実習施設にしていることから、実際に子どもたちやその保護者への対応が学べることがメリットである。

また、笑顔や実習態度についても学べたとの記述や、患者や保護者とのコミュニケーション、スタッフ間の情報交換などの気づき等から、最初にクリニック実習を経験することが臨床実習Ⅱ（総合病院での実習）をよりスムーズに実習できることにつながると推察された。

臨床実習での学びを深めるためにも、学生に多くの内容を学ばせようとするのではなく、ポイントを押さえしかも目標が達成できるような教材⁵⁾や具体的な評価基準や評価方法の検討⁶⁾が必要である。太田⁷⁾は、実習病院・実習指導者との打ち合わせが重要であると指摘している。本学では、病院との打ち合わせはしているがクリニックとの打ち合わせができていない。今後クリニック実習をより充実させるためにも、クリニックとの事前打ち合わせや本研究結果を踏まえた、現在使用している臨床実習Ⅱの評価表のような、実習目標を具体的に提示したクリニック用の自己評価教材を作成したい。また、内科、小児科、外科、整形外科、アレルギー外来、病児保育、リハビリなど自分が経験していないクリニックでの実習内容を知り、全体でシェアする機会を設けることも必要である。

7. まとめ

養護教諭専攻の学生117名を対象に、クリニック実習での学びを調査し、養護教諭志望指数

(0～10)、学校や保健室ボランティア経験の有無で比較した。また、クリニック実習での学びの記述を病院実習目標項目で比較した。その結果、学校や保健室ボランティアの経験者は養護教諭志望指数が高い傾向を示した。クリニック実習の目的的理解やクリニック実習での学びと養護教諭志望指数とに関連は認められず、概ねクリニック実習の目的を理解していた。クリニック実習での学びは、「死生観」と「生活習慣病」に関する記述はなかったが、看護の基本、患者や保護者の気持ちの理解、学校との連携、養護教諭の職務に活かすなど病院実習目標 16 項目のうち 14 項目で記述があった。これは、実習期間の指導者が学校医であることから、養護教諭の役割や学校との連携について指導いただいているからであると推測した。今後クリニック実習をさらに充実させるために、具体的な目標項目を列挙した教材を作成したりクリニック実習だけの振り返りを実施したりして、個々の経験をシェアする必要がある。

本研究は、本学倫理審査（受付番号 29-24）を通過した。

文献

- 1) 文部科学省：現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～，2017
- 2) 中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体として取組を進めるための方策について」2012
- 3) 塚原加寿子，笠巻純一，松井賢二，波多幸江：養護教諭が認識する周囲からのニーズに関する研究－A市における小・中学校に着目して－，日本養護教諭教育学会誌 Vol21, No1, 88－107, 2017
- 4) 日本養護教諭教育学会：本学会と養護教諭関係団体連絡会の取り組みについて，日本養護教諭教育学会誌 Vol20, No2, 88－107, 2017
- 5) 大須賀恵子，館英津子，大澤功，佐藤祐造：養護教諭学生の看護実習における目標達成のためのプロセス，愛知学院大学心身科学部紀要第4号，1－7, 2008
- 6) 鈴木裕子：養護教諭養成における臨床実習からの学生のまなび，教育学論叢 33, 115－133, 2016
- 7) 太田静江：専攻科養護教諭専攻課程における特別臨床実習についての一考察，帝京短期大学紀要 (19), 55－65, 2016
- 8) 日本養護教諭養成大学協議会 FD 委員会：養護教諭養成大学等における養護実習・病院実習の実情と課題，2008年度日本養護教諭養成大学協議会 FD 委員会活動報告，2009